

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00515

研究課題名(和文)『ローランの歌』と日本近現代：西洋文化受容と自文化アイデンティティ構築

研究課題名(英文) The Song of Roland and Modern Japan: reception of Occidental culture and construction of cultural identity

研究代表者

黒岩 卓 (KUROIWA, TAKU)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：70569904

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、中世フランスの叙事詩『ローランの歌』の日本近現代における受容とそのインパクトを研究したものである。とくに戦前から戦後にかけて、「武士道」や軍記物語のイメージを通していかに「敗北」や「滅び」といったテーマの影響下で『ローランの歌』が解釈・紹介されていたかを明らかにした。その過程で、日本での紹介・翻訳・研究に大きな力のあった坂丈緒や佐藤輝夫といった学者らの業績を調査しその再評価を行った。さらに戦後の児童文学としての翻案にも目配りを行い、同作品が20世紀を通じてどのように日本社会で広く受容されたかについても示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的・社会的意義は、中世フランス文学の研究や作品紹介を限られた好事家や研究者の興味の対象としてではなく、日本の近代化の歩みと密接に結び付いたものとして示したことにある。また中世フランス文学の代表作である『ローランの歌』の「日本的」解釈のありかたを示しそれを海外の研究者とも共有した。つまり本研究課題を通じて研究代表者は、日本社会に対しては近現代における西洋文化受容の具体例とその意義を示し、またフランスなど海外の研究者コミュニティに対しては、西洋の文化遺産が日本において再解釈・土着化される過程を明らかにし、もって日本の人文学の独創的側面を示したといえるだろう。

研究成果の概要(英文)：This research project examines the reception and impact of The Song of Roland, the most famous medieval French epic, in modern Japan. In particular, it clarifies how The Song of Roland was interpreted and introduced under the influence of themes such as "defeat" and "destruction" through the image of "bushido" and Japanese war tales from before to after WWII. In the process, it investigates and reevaluates the achievements of scholars such as Ban Takeo and Sato Teruo, who played a significant role in introducing, translating, and researching The Song of Roland in Japan. It also looks at the postwar adaptation as children's literature and shows how the work was widely accepted in Japanese society throughout the 20th century.

研究分野：中世・ルネサンスのフランス文学

キーワード：比較文学 仏文学・仏語圏文学 近・現代文学 異文化コミュニケーション・翻訳・通訳 グローバル化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、中世フランスの叙事詩『ローランの歌』の受容が日本の近現代で果たした役割を明らかにすることを目的とする。その根本的な問いは「日本人によるフランス文化ひいては西洋文化の受容は、近現代の日本人にとってどのような意義があったのか、そしてこの受容は多極化する今日の世界でどのような意味をもつのか」というものである。

『ローランの歌』の受容は「武士道」のような日本近現代の文化的アイデンティティの核の一つともいえる概念の成立に寄与した。さらに『平家物語』といった日本古典の解釈にもその痕跡を残し、第二次世界大戦中には日本の国策を支える役割も担っている。つまり『ローランの歌』は日本人が(当時において自国から見た)先進国の文化遺産を取り入れ、それと対峙しつつ自らの文化的アイデンティティの再定義を行い、さらにそこから得た知見を社会で具体化させようとしたプロセスを理解する上で、格好の例を成しているのである。

こうした西洋文化受容と自文化アイデンティティ構築の両立は、現在でも多くの新興国・開発途上国の人々にとって(程度の差はあれ)重要な課題である。本研究課題の成果を世界的に発信することで、日本の西洋文化研究、ひいては日本の人文学が有しているアクチュアリティを国内外で可視化することを目指す。そのためにとくに日本における中世フランス文学の研究者の諸業績を分析し、その結果を多言語で発信する。またその成果については、これを日仏交流史という枠組みに収めるよりは、近代化のプロセスに付随する「自文化アイデンティティの構築」の一モデルとして位置づけることを試みる。

## 2. 研究の目的

フランス文学史上最初の傑作とされた『ローランの歌』の紹介とその研究は、意外なほど密接に戦前・戦中・戦後の日本社会と切り結んでいた。11世紀に成立したとされる『ローランの歌』は、イスラム教徒との戦いにおける英雄ローランの死、そして彼の伯父シャルルマーニュ(カール大帝)に率いられたキリスト教徒の最終的勝利を描いた叙事詩である。本研究課題はこの作品の受容に大きく寄与した三人の学者(前田長太、坂丈緒、佐藤輝夫)の業績に着目し、彼らの作品紹介・翻訳などを、以下に述べる複数のテーマを軸として分析する。そして彼らが当時の日本からみた先進国(この場合はフランス)の「国民的叙事詩」を受容し、それと対峙しながら自分たちの文化的アイデンティティの再定義を行い、さらにそこから得た知見を日本社会に反映させようとした諸例を示す。

## 3. 研究の方法

本研究課題は『ローランの歌』の日本における紹介において力のあった以下の三人物に注目する。すなわち、

(1)日本人として最初にカトリック教会の司祭として叙階された人物の一人であり、その後還俗して慶應義塾大学でラテン語やフランス語を講じた前田長太(1867-1939)

(2)宮内省御歌所寄人であった阪正臣の息子として生まれ、学習院を卒業しフランス政府給費留学生としてパリで文献学を学んだ坂丈緒(1904-1983)

(3) 戦後の日本におけるアカデミックな中世フランス文学研究を確立した佐藤輝夫(1899-1994)

である。以上の三人の学者に焦点を当てて各々の『ローランの歌』紹介・翻訳を調査する。その際にとくに「言葉の創造」、「自文化との類比」、「政治的・社会的文脈」という三つのテーマを軸とする。これを通じ、「中世フランスの事物・制度を表現するための日本語」を創造するという試みの諸相を明らかにし、どのように彼らが『ローランの歌』と日本の文化的伝統を対置ないしは類比しつつ前者を理解・紹介しようとしたのかを検証し、とくに三者の業績から彼らがどのような政治的・社会的役割を『ローランの歌』に与えようとしたのかを調査することを目指す。

以上の調査を行う際にはフランス文学の作品をとりあげつつも、「文化的移行の観点からみた日本の人文学」に重点を置く。つまり、従来の作品研究の立場からすれば「誤った解釈」なり「偏った紹介」とされる事象にむしろ大きな意味を見出し、それを通じて日本近現代における西洋文化の受容と自文化アイデンティティ形成との間の相関関係を理解していこうとする。さらにその対話の相手として、エリアを問わず広く文化的移行に興味を持つ世界中の人々を想定し、この受容のプロセスそのものを世界史的な視点で眺めようとする。また発信に際しては日本語、英語、フランス語を適時使いわける。

#### 4. 研究成果

本研究課題は新型コロナウイルスの流行下において開始された。またそれ以前の行動制限により前年度までに終了する予定であった旧研究課題を延長せざるを得なくなったこともあり、研究期間を一年間延長して遂行された。

本研究課題の成果として、前田長太、坂丈緒、佐藤輝夫の業績、とくに後者二人のそれを国際的に可視化出来るかたちで明らかにしたことが挙げられる。まず『ローランの歌』の原文からの初訳者である坂丈緒については、その父である阪正臣の事績を含めた種々の資料調査を行い、坂が生きていた知的な風土を明らかにすることができた。またパリ留学時代の影響、さらに彼の訳書である『ロオランの歌：回教戦争』が収録された『世界戦争文学全集』に深く関わっていた丸山熊雄、小島威彦、仲小路彰といった人々の影響や、当時の戦争プロパガンダとの関わりなどを明らかにすることができた。また『ロオランの歌：回教戦争』における訳語の分析を行い、彼が作り上げた訳語がどの程度までその後の佐藤輝夫や有永弘人による日本語訳に継承されたかも具体的に示すことができた。他方、佐藤輝夫の業績を中心とした戦前・戦中のフランス文学者による『ローランの歌』の紹介や解説を網羅的に調査した結果、日本において「滅びの美学」に沿った『ローランの歌』解釈が成立した流れを明らかにすることができた。さらに二十世紀を通じて日本でいかに『ローランの歌』が少年少女向け文学として受容されたかを明らかにした。これら少年少女向け翻案・紹介はとくに一九五〇年代および一九六〇年代に多数出版されるが(その翻案者の中には佐藤輝夫も含まれる)、それらを概観することで日本での『ローランの歌』受容の大きな流れを効果的に可視化することができた。一方、前田長太についてもその生涯についての調査を行ったが、その成果発表については今後の課題とした。

以上の調査結果は種々の雑誌や書籍において発表されている(報告書に記載されたもののほか審査中のものも一点ある)。さらにオンラインあるいは対面による国際シンポジウムなどでの発表を通じ、日本国内外のさまざまな分野の研究者と共有することができた。さらに研究課

題申請時に予定していた西アフリカ訪問を行い、同地における「中世」の表象について現地の諸大学の教員・学生らと意見交換を行うことができた。最終年度中盤にはローザンヌ大学で開催された夏期講習に講師として参加し講演を行うほか、同年度後半には広島大学において集中講義を行い、授業を通じて本研究課題の成果を学生たちに還元することができた。加えて同年度末にはフランスから若手研究者を招聘してハイブリッドによるセミナーを開催し、多くの参加者と本研究課題を巡る諸問題を共有・討議することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 KUROIWA Taku	4. 巻 0
2. 論文標題 The Ideological and Human Background of The Song of Roland: Islamic War: Regarding the References about Islamic Civilization	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 YONAOSHI Visions of a Better World (Edited by Christopher Craig, Enrico Fongaro, Luca Milasi and James Tink)	6. 最初と最後の頁 47-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒岩 卓	4. 巻 86(3 4)
2. 論文標題 坂丈緒訳『ロオランの歌』における造語・既存の語の応用について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化(東北大学文学会)	6. 最初と最後の頁 154, 253-268
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 黒岩 卓	4. 巻 87(3 4)
2. 論文標題 二十世紀の日本における『ローランの歌』の少年少女向け翻案・紹介	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 文化(東北大学文学会)	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件/うち国際学会 7件）

1. 発表者名 KUROIWA Taku
2. 発表標題 The "Aesthetics of Perishing" and the Japanese Reception of The Song of Roland
3. 学会等名 Naraku: Discord, Dysfunction, Dystopia (The 7th Annual Hasekura International Japanese Studies Symposium) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 KUROIWA Taku
2. 発表標題 'Renaissance' of the World by Japan and The Song of Roland - The Appropriation of French Medieval Literature by Japanese Militarist Movements in the 1940s -
3. 学会等名 Yonaoshi: Envisioning a Better World (The 6th Annual Hasekura International Japanese Studies Symposium) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Justine Breton, Kuroiwa Taku
2. 発表標題 Youth literature Video Games Chivalry: Contact Point or Battlefield for Eastern Western Medieval imaginations?
3. 学会等名 Medievalismes des quatre coins du monde : Le moyen age, vecteur de domination ou miroir de la diversité culturelle ? (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kuroiwa Taku
2. 発表標題 Roland, un samurai occidental ? La constitution d'un imaginaire "medieval" composite au Japon moderne
3. 学会等名 Medievalismes des quatre coins du monde : Le moyen age, vecteur de domination ou miroir de la diversité culturelle ? (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Anne-Cecile Le Ribeuz-Koenig, Laurent di Filippo, Kuroiwa Taku
2. 発表標題 Le Moyen age, vecteur de domination ou miroir de la diversité culturelle ?
3. 学会等名 Medievalismes des quatre coins du monde : Le moyen age, vecteur de domination ou miroir de la diversité culturelle ? (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 黒岩卓
2. 発表標題 二〇世紀日本における『ローランの歌』
3. 学会等名 第19回支倉セミナー「中世」の表象とその受容：日本とヨーロッパの諸例」（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 マリン・マッセンジオ＝デハロ
2. 発表標題 ヒーローの復帰と忘れられた人物の復活：日本の視点で『アーサー王物語』を語ること
3. 学会等名 第19回支倉セミナー「中世」の表象とその受容：日本とヨーロッパの諸例」（国際学会）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 KUROIWA Taku (ed. by Christopher Craig, Enrico Fongaro, Luca Milasi and James Tink)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Mimesis International	5. 総ページ数 176
3. 書名 Yonaoshi. Visions of a Better World (部分執筆)	

1. 著者名 KUROIWA Taku (ed. by Kuroiwa Taku and Chiara Ramero)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 GPJS(Tohoku University), LITT&ARTS(Grenoble Alpes University)	5. 総ページ数 68
3. 書名 The past as a source of imagination and inspiration (部分執筆)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 第19回支倉セミナー「「中世」の表象とその受容：日本とヨーロッパの諸例	開催年 2024年～2024年
---	--------------------

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------